

2014 年度医学物理士海外派遣研修 研修報告書

がん・感染症センター 都立駒込病院
放射線物理室 古谷 智久

2014年6月22日から26日の5日間で米国バーモント州バーリントン、バーモント大学にて開催された2014 AAPM Summer Schoolに参加した。参加者数は約260名、うち日本からの参加者は筆者を含め2名だった。今年のテーマは“SRS/SBRT/SABR: Safely and Accurately Delivering High-Precision, Hypofractionated Treatments”であった。当院では近年、肺に対するSBRTだけでなく、前立腺、肝臓、椎体に対するSBRTの実施可能性も検討している段階であるため、今回のSummer Schoolはまだ報告の少ないこれらの部位のSBRTに関する最新の情報を得られる絶好の機会であった。

プログラム内容はSBRTの歴史、将来性から始まり、hypofractionationにおける放射線生物学的影響、SBRT実施可能な照射装置の特性についての授業があり（以上、day1）、物理士にとって必要な臨床現場ですぐに役立つ医学の基礎知識、照射時に注意すべきリスク臓器の説明やcontouringのレクチャーが脳・椎体、肺、前立腺、膵臓・肝臓の各分野で放射線腫瘍医により行われた。放射線腫瘍医の視線からみたSBRTのレクチャーは貴重であり、治療計画確認時の注意点を新たに知ることができた。一回線量が大い SBRT では医療安全の観点からエラーの原因を見直すレクチャーもあり、近年米国で報道された照射事故を意識した内容であった（以上、day2、3）。

2日目の午後はSummer Schoolでは初の試みであるRound table focused discussionが行われ、並べられた20の円卓の一つ一つに用意されたテーマについて自由に討論する時間が設けられた。テーマは全てSBRTに関するもので、“Investment Strategies in SBRT Resources”、“Physician Experience and Concerns”、“Marker Tracking in SBRT”、“4D Simulation and Planning”等様々であった。

4日目は小照射野に関するレクチャー、画像やfusionに関するレクチャー、最終日はmotion managementに関するレクチャーと続き、5日間でSBRTに関するすべてを網羅する大変凝縮されたプログラムであった。

全体を通して臨床現場での事例とそれを裏付ける論文紹介のバランスが適切であり、講師陣のプレゼンテーションスキルも大変に勉強になった。

最後に今回このような貴重なセミナーの参加を支援していただいた医学物理認定機構に深謝いたします。